

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00540

研究課題名(和文)オリヤ語の多項文における格標示に見られる、項どうし間の相互交渉の研究

研究課題名(英文) Interactions between clausal arguments in Odia reflected in case marking

研究代表者

山部 順治 (YAMABE, Junji)

熊本大学・大学院人文社会科学研究部(文)・准教授

研究者番号：00330598

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文中の名詞句の格標示がどのように決定されるか、についてである。格標示は、文中の個々の項それ自身の性質によってだけでなく、文中の項どうしの相対的關係によっても左右される。その様子に関し、オリヤ語(インド東部・オリッサ州、印欧語インド語派、話者数約4000万)においては、他言語では見られない独特な事象が多様に見られる。本研究では、オリヤ語の現地でフィールドワークを行い資料収集を行なった。そこで明らかになったオリヤ語特有の事象を考慮に入れることにより、言語一般について高次の事実一般化を提示し、また、それら事象を理論的に分析することによって、根源的な理論的理解へ進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、オリヤ語についてフィールドワークにより資料を収集し、同言語に独特な諸事象を発掘することによって、言語の多様性に関する視野を広めたほか、近年の言語学における理論的論点に関して新資料・新見解を提供した。また、オリヤ語の資料収集を広範囲の領域にわたって実施したことにより、オリヤ語の全体像の理解へ貢献した。本研究の成果は、言語学の諸問題の解明に資するのみでなく、オリヤ語の学習教材の整備にとっても有用である。

研究成果の概要(英文)：This research concerns how case marking on noun phrases in sentences is determined. Case marking is affected not only by the features of the noun phrases themselves, but also by the relative relation between the noun phrases. Regarding how this happens, Odia (Odisha, Eastern India, Indo-European, spoken by approximately 40 million people) presents a variety of facts some of which are cross-linguistically unusual. This research conducted a series of fieldwork in Odisha for data collection. Taking into account the observations unique to Odia, it yielded higher factual generalizations valid across languages, and analyzing those facts, it advanced theoretical understandings to a more radical level.

研究分野：言語学

キーワード：オリヤ語(オディア語) オリッサ州(オディシャ州) インドの言語 統語論 言語類型論 フィールドワーク 名詞句階層 視点

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究は、文中において格標示がどのように決定されるか、を取り上げた。オリア語(インド東部・オリッサ州、印欧語インド語派、話者数約4000万)で見られる複雑な様相の事実を記述し、その資料に基づいて言語学の理論的論題の解明をすすめた。

格標示を決定する諸要因は、二つに分類できる。一つの類は、文中のそれぞれの項じたいが担っている特性であり、より具体的には、その項が文中でどんな役割を果たしているか(文法関係、意味役割)や、どんな事物を指しているか(有生性、定性など)である。オリア語では、例えば例文(1)のように、文法関係が目的語の場合、指示対象が無生物なら目的格 OBJ と主格 NOM のいずれも可能で、有生物を指すなら必ず目的格となる。例文中の不適合な表現に*マーカを引く。

- (1) *baapi* { *ghara-Taa-ku* | *ghara-Taa-* | *saaran-ku* | **saar-* } *dekh-il-aa*.
 Bapi room-CL-OBJ room-CL-NOM sir-OBJ sir-NOM see-PAST-3SG
 バピは { 部屋を(OBJ)NOM | 先生を(OBJ | *NOM) } 見た。CL:classifier

本研究は、格標示の決定要因のもう一つの類に注目した。文中に項が2個以上ある場合(多項文)には、格標示は項どうしの相互交渉によって左右される。これに関して、研究代表者(山部)は、オリア語において2種類の制約を指摘していた。すなわち、格の異化的な制約(以下、「制約A」と呼ぶ)および名詞句階層に関する制約(以下、「制約B」)である。制約Aは、特定の構文において、文中の2名詞句が同一格で標示されることを禁ずる。制約Bは、文中の2名詞句が同一格で標示されたときに、両名詞句の名詞句階層(有生性の階層[1・2人称>人(3人称)>非情物] cf. Silverstein 1976)上の相対的関係を制限するものである。例えば、(2)の文では、制限Bのため1あるいは2人称が目的語になれない。本研究はこれらの指摘を発展させるものであった。

- (2) *saaran-ku aaji* { *gunu-maan-an-ku* | ??*aama-ku* } *dekh-ibaapaai- paD-ib-a*.
 sir-OBJ today Gunu-OBJ us-PL-OBJ see-INF fall-FUT-3SG
 先生は(OBJ) 今日 { グヌ(人名)(OBJ) | ??私達(OBJ) } を見ざるをえないだろう。

これら2種類の制約に関連する先行研究としては、研究代表者による報告を除けば、オリア語の事象を扱ったものはない。一方、他言語において見られる(部分的に)類似した事象について記述的蓄積があり、また、それらの理論的分析として諸説が提出されていた。主なものは次のようだ。格の格異化的な制約(制約A)に関しては、諸言語の二重他動詞文における類似事象が取り上げられており、Case OCP と呼ばれることがある(Alexiadou and Anagnostopoulou 2001、ヒンディー語 Mohanan 1993, 1994、スペイン語 N. Richards 2010、など)。名詞句階層に関する制約(制約B)については、人称・格制約(PCC)と呼ばれる事象が名詞句階層[1・2人称>3人称]に言及するという点で、それとの共通性が認められる(人称・格制約については、生成文法(Anagnostopoulou 2017など)や機能的類型論(Haspelmath 2004))。日本語においても、他動詞2項の名詞句階層上の相対的関係が目的語の示差的格標示に関与している事例が、下地理則(2016秋、日本言語学会)竹内史郎(2018、日本言語学会夏季講座)によって指摘されている。また、人・称格制約は、北米大陸の諸語族(Aissen 1997, 1999)に見られる obviation の事象と、(相違点とともに)類似点が指摘されている。

オリア語の2制約(制約A,B)については、他言語に類似事象がある一方で、他言語では見られないほどの多彩さや、先行研究で普遍的だと主張あるいは仮定されている性質に反する性質が見られる。本研究は、オリア語の事象の記述することにより資料的により高次の一般化を可能とさせ、それを理論的に分析することにより根源的な理論的理解へ進むことができると考えた。

2. 研究の目的

記述的な観点としては、2制約(A,B)に関して、主に次の ~ の項目についてオリア語の諸事実を記述し、資料を収集した。

構文文脈の構造の関与 両制約(A,B)の適用のしかたは、定動詞節と、種々の縮約的構造の節とで、どのように相違するか。

種々の格について 両制約(A,B)は文中で同一の格が共起することを制限する働きをするが、どの格に関してどのように適用されるか。オリア語の5つの格(目的格、属格、所格、奪格、主格)について点検する。また、格語尾以外に、後置詞についても、同一物の文中共起について点検する。

名詞句階層の詳細 制約Bは、有生性の階層[1・2人称>人(3人称)>非情物]に言及するものだが、この階層にはいくつの区分が適切か。各区分にどんな名詞句が所属するか。類別詞の種類や有無に伴う相違。類別詞を含む種々の構造に伴う相違。集合名詞の種類や、集合名詞の複数/単数扱いに伴う相違。

示差的格標示との関連 格制約Bと同様に、示差的格標示のある場合は、名詞句階層 [人>非情物]へ言及する。後者に関しては、目的語の非情物の格標示は、(3a)(および(1))のように主語が人なら主格でも目的格でよいが、(2b)のように主語が非情物主語なら必ず目的格である。

(3) a. 大臣が(NOM) {その工事を (OBJ(-ku) | NOM(-))} 止めさせた。

b. 大臣の命令が(NOM) {その工事を (OBJ(-ku) | *NOM(-))} 止めさせた。

制約Bによる非文と例文(2)のような示差的格標示という2種の事象の相違は、制約回避の手段が別段に存在するかどうかだ。制約Bはそれがない場合で、それがあれば示差的格標示として観察される。オリア語の文法は、両種の事象が文法の随所に生起し、両者を一望にして考察するのに絶好の資料を提供する。

疎遠 obviation との関連 オリア語の制約Bは、北米大陸の諸語族に見られる obviation の事象 (Aissen 1997, 1999) と動機づけを共有している。いずれの事象も、文中の2項について、名詞句階層上の相対的關係に言及するという点では共通だが、obviation は3人称名詞句どうしについて親疎の階層 [近接>疎遠] に言及するものである。それでは、文法的な仕組みとして、両者の関連性はどうか。

研究文献にみられる理論的主張に関しては、次の論題 ~ について考察を行った。

格の異化的な制約 (制約A) については、研究文献によれば、大別して2種類の事象がある。音韻論・形態論における原則である OCP に類似のものか (ヒンディー語の二重目的格 Mohanan 1993, 1994, スペイン語の二重目的語 N. Richards 2010 など) あるいは、(生成文法でいう) 格照合に課される条件 (Alexiadou and Anagnostopoulou 2001 など) であるか。

文脈による異化的効果に段階的強度の差があるが、それはどのような条件でよるのか、それをどんな文法的仕組みで導き出すか。

名詞句階層に関する制約 (制約B) については、生成文法 (Anagnostopoulou 2017 など) では、統語論的な仕組み (一致ないし格照合) によるとする一方、機能類型論的な観点 (M. Haspelmath 2004) では、言語使用に関する理由 (頻度の偏り) に帰する。両派は、説明に関して大きく相違するが、論拠の事実に関しては共通して「人称・格制約は、1・2人称が動詞一致が代名詞弱形のように縮小した形式で表現されている場合にのみ発動する」という前提を受け入れている。オリア語の事実は、(2)に示されるように、そうでなく1・2人称が自立形で現れる場合でも発動する。どちらの主張にとっても問題を提起する。

人称・格制約 (PCC) と obviation との関連は、どうであるか。これらが同一の原理に帰されるかどうかについては、諸説ある。オリア語において、後者の概念の関与 (の有無および様態) を明らかにし、両者の関連を明らかにする。オリア語における状況を、オリア語の資料に基づき、また、先行研究の諸言語と対比することにより、人称・格制約と obviation との関連を解明する。

3. 研究の方法

2節に述べた観点に関して、事実を発掘・整理しそれに理論的説明を与えた。本研究の研究対象言語はオリア語であるが、補助的に日本語も扱った。(1)インド、および(2)国内の勤務校における作業は次のとおりである。

- (1) インド・オリッサ州の2地点 (次の ,) において、フィールドワークを行いオリア語に関する資料を収集した。主に、話者との面接によるもので、作例についての適格性判断を収集した。このほか断片的に、自発的談話も採集した。

カタック市においては、数回の旅行によって調査を実施した。時期は、次のとおり。期間の長さは、(特記)なければ1か月弱。

2022年5~6月

2022年11月(10日間)

2022年12月~2023年1月

2023年5~6月

2023年10月~11月

2023年12~2024年1月

2024年3月(8日間)

これらの一連の調査では、毎日4時間ずつ、オリア語話者1名の協力者を対象に面接を行った。この協力者とは1996年から協働を継続してきた。詳細にわたる項目を取り上げ、本研究開始以前から蓄積してきた資料を拡張・精緻化した。

ベルハンプル大学（ベルハンプル市（ブラフマプル市））では、次の時期に、10日間滞在し調査を実施した。

2024年3月

同大学における調査では、2名の話者と総計24時間面接を持った。協力者は大学院生だった。複数の話者から情報提供を得ることによって、数点の事象については話者間をとおして一定程度の一般性を持つことを確認し、また数点の事象については話者間で変異することを観察した。同大学での調査は、今回が初回であり、今後の調査のために研究環境を準備した。今後は、2024年8~9月に同地でより広範な調査を行う予定である。

- (2) 勤務校（熊本市）においては、オリヤ語資料の整理・考察、次回調査の質問整備、日本語の関連事象についての資料収集、理論的考察を行った。

4. 研究成果

発表論文・学会発表・講演は下記表のとおりである。著者・発表者・講演者はいずれも研究代表者（山部）単独。これらについて4つの領域(1)-(4)に分けて述べる。

- (1) オリヤ語における格の異化的な制約（制約A）

発表論文 4,8

オリヤ語においては、文中で同一格名詞句が共起するのを制限する制約（制約A）がある。これに関して次の点を明らかにした。本制約は、諸条件によって、それが発動するかどうか、また、発動の強度はどんなか、が相違する。次のようである。本制約は、同一格の2名詞句が現れている環境が典型的な主語を欠いているという節の特徴により効力が発動し、同一格の名詞句じたいが文中で担っている特徴（意味役割など）には関知しない。本制約が発揮される強度は、この特徴の累積によってより強まる（論文8）。また、同一格名詞句の構成要素の語彙的選択によっても、異なる（論文4）。すなわち、一般の名詞に対し代名詞は、制約が発揮される強度が一段強く、また、格語尾に対し後置詞には、制約は強く適用される。

- (2) 名詞句階層に関する制約（制約B）

発表論文 1, 3, 7

制約Bの適用される範囲が話者によって相違することを報告し、その理由は話者間で二重他動詞の構造が異なるからだと説明した（論文7）。

北米の諸語におけるobviationとオリヤ語における制約Bの関連（3節の ）に関しては、本研究開始時は、これら2つの文法的規則の間には、文中2名詞句の名詞句階層における相対的位置関係に言及するという点に共通性を指摘していたが、本研究によるオリヤ語の調査によって実際にも並行する事象が明らかになった。すなわち、obviationの効果とされる非同一致示（Aissen 1997のgenitive effect）の事象は、オリヤ語においても観察される。また、この非同一致示が適用する範囲は、制約Bの適用範囲と一致する。このことから、オリヤ語においては、両者を統一的に扱うことが適切であると結論付けられ、オリヤ語の状況は理論的に（少なくともある言語においては）obviationと制約Bがより包括的な原理にしたがうという可能性を支持する。

- (3) オリヤ語文法に関するその他のトピック

発表論文 2, 5

オリヤ語の名詞句内において、格標識が補部名詞と複数性一致を示すことを明らかにした（論文2,5）。この事象は、同系の他言語では見られず、通時的には文法構造の異分析によって生じたと論じた。この事象は、今後の研究において実証的・理論的に解明すべき題材を提供した。具体的には、数の標示という包括的な論点から、助数詞などの数に関わる表現との相互関係を含めて、解明していくことになる。

- (4) 日本語

発表論文 6

日本語混成語のアクセントに関して、言語学の授業において2013-2020年に実施したアンケート調査の蓄積をもとに、新規の混成語に適用されるアクセント規則とその話者間変異を報告した。

発表論文

下記はいずれも、研究代表者（山部）の単著。

((括弧)は査読の有無)

1. A non-coreference rule in Odia

- 『ありあけ』 22, 19-48. 2024 年 3 月 (無)
2. オリヤ語の名詞句において格標識が名詞と一致を示す
『日本言語学会第 167 回大会予稿集』 364-370. 2023 年 11 月 (無)
 3. オリヤ語の非同一指示規則
『日本言語学会第 166 回大会予稿集』 206-212. 2023 年 6 月 (無)
 4. Variation of Case OCP Effects in Odia
『人文科学論叢』 4, 21-41. 2023 年 3 月 (有)
 5. The distribution of the pairs of identically case-marked NPs in Odia: what can occur where and how
The 44th International Conference of Linguistic Society of India (ICOLSI-44) Abstracts, 40-41,
2022 年 11 月 (有)
 6. 混成語のアクセントに関する話者間変異
『ありあけ』 21, 45-62. 2022 年 3 月 (無)
 7. The Person-Case Constraint in Two Dialects of Odia
『人文科学論叢』 3, 7-29. 2022 年 3 月 (有)
 8. オリヤ語における、同一格制約の効力が { ない | ある | 強くある } 構文
『日本言語学会第 163 回大会予稿集』 115-121, 2021 年 11 月 (無)

口頭発表

下記は、いずれも研究代表者 (山部) の単独発表。

1. How Sanskrit linguistics influenced the Japanese script, Berhampur University, India, invited talk.
2024 年 3 月 27 日
2. 論文 2 の口頭発表、同志社大学田辺キャンパス、2023 年 11 月 11 日
3. 論文 3 の口頭発表、専修大学神田キャンパス、2023 年 6 月 10 日
4. 論文 5 の口頭発表、Centurion University, Bhubaneswar, India. 2022 年 11 月 26 日
5. 論文 8 の口頭発表、オンライン、2021 年 6 月 26 日

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 YAMABE, Junji	4. 巻 22
2. 論文標題 A non-coreference rule in Odia	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ありあけ	6. 最初と最後の頁 19-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山部順治	4. 巻 -
2. 論文標題 オリヤ語の名詞句において格標識が名詞と一致を示す	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本言語学会第167回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 364-370
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 YAMABE, Junji	4. 巻 -
2. 論文標題 オリヤ語の非同一指示規則	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本言語学会第166回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 206-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Junji Yamabe	4. 巻 4
2. 論文標題 Variation of Case OCP Effects in Odia	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人文科学論叢	6. 最初と最後の頁 21-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 YAMABE, Junji	4. 巻 -
2. 論文標題 The distribution of the pairs of identically case-marked NPs in Odia: what can occur where and how	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The 44th International Conference of Linguistic Society of India (ICOLSI-44) Abstracts	6. 最初と最後の頁 40-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山部順治	4. 巻 21
2. 論文標題 混成語のアクセントに関する話者間変異	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ありあけ	6. 最初と最後の頁 45-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 YAMABE, Junji	4. 巻 3
2. 論文標題 The Person-Case Constraint in Two Dialects of Odia	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文科学論叢	6. 最初と最後の頁 7-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山部順治	4. 巻 -
2. 論文標題 オリヤ語における、同一格制約の効力が { ない ある 強くある } 構文	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本言語学会第163回大会予稿集	6. 最初と最後の頁 115-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 YAMABE, Junji
2. 発表標題 How Sanskrit linguistics influenced the Japanese script
3. 学会等名 Berhampur University, India, invited talk (招待講演)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 山部順治
2. 発表標題 オリア語の名詞句において格標識が名詞と一致を示す
3. 学会等名 日本言語学会第167回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山部順治
2. 発表標題 オリア語の非同一指示規則
3. 学会等名 日本言語学会第166回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Junji Yamabe
2. 発表標題 The distribution of the pairs of identically case-marked NPs in Odia: what can occur where and how
3. 学会等名 The 44th International Conference of Linguistic Society of India (ICOLSI44) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山部順治
2. 発表標題 オリヤ語における、同一格制約の効力が { ない ある 強くある } 構文
3. 学会等名 日本言語学会第163回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
インド	Berhampur University		